



生活やものづくりの学びNetニュース

第 11 号
2016 年 2 月 発行

2015 年度 総会・シンポジウム報告

2015 年 9 月 27 日 (日) 於：キャンパス・イノベーションセンター東京

シンポジウム「生活やものづくりの学びを通して、子どもたちのどのような資質・能力を育てるか」

時間 13:30～15:00

シンポジスト (敬称略)

- ・原田信一 (京都教育大学教授)
- ・小澤雄生 (京都教育大学附属京都中学校教諭)
- ・小柘由美 (広島県立教育センター指導主事)
- ・安東茂樹 (京都教育大学理事・副学長)
- ・鈴木明子 (広島大学教授)

司会 沼口博 (大東文化大学教授)

1. 実践報告

以下、3人の報告者の報告内容の概略を紹介する。

①実習の体験が育む学びの楽しさ——生物育成の実習を通して

原田信一 (京都教育大学教授)

中学校技術・家庭科技術分野の学習内容として、生物育成が必修化された。生徒に「心の豊かさ」を獲得させる手段として栽培学習の教育的意義があると考えている。そこで「生物育成」における栽培学習の題材を開発し、授業実践において、生徒の心的成長を実証的に検討することを目的とした。

栽培学習が生徒の心的成長を促す教育効果としてつぎのことがあげられた。①生命の大切さ、②生きものを育てることの意味、③生きることと食・農との関係、④人としての自分と植物の関係、⑤植物の成長とそれを待つことの意味、⑥自分を取り巻く環境と自分との関係である。

題材開発は、生物育成の主題材として「大根の袋栽培」を、副題材として「アロマティカスの栽培」を取り上げた。

副題材「アロマティカス」の授業実践は、京都府内の公立中学校1・2・3学年の24名(男子14名、女子10名)を対象に、アロマティカスの鉢上げを平成25年7月下旬に行った。主題材「大根の袋栽培」の授業実践は、京都市内の公立中学校2年生162名(男子74名、女子88名)を対象に、平成25年9月から12月に行った。

授業実践前後に行ったアンケート調査における4件法の調査結果では、「アロマティカスの鉢上げは楽しいと思うか」の設問では、「思う」「どちらかというと思う」が、授業前では45.8%であったが、授業後は66.7%であり、有意差が認められた。また授業後のアンケートから「アロマティカスを育ててみたいと思う」「鉢上げ作業は難しいとは思わない」など、題材としてのアロマティカスへ、生徒は肯定的に考えている

ことが明らかになった。

②技術の授業実践と育てたい資質・能力——技術科教育におけるアクティブラーニング型授業の実践

小澤雄生 (京都教育大学附属京都中学校教諭)

研究目的は、本校の今年度からの研究主題である「グローバル社会に対応し、自己実現を目指す生徒の育成」を念頭に、技術で育みたい力の育成について、授業方法によって今までの授業との比較を行うことにある。

平成25年にまとめられた教育再生実行会議(大学教育改革)において、課題発見・探求能力・実行力といった「社会人基礎力」などの社会人として必要な能力を有する人材育成が必要であり、社会との接続を意識した教育の強化が必要であると提言された。将来を見越した授業の実践は、中学校教育にも取り入れるべきだと考える。教育活動においては、「教える」視点だけではなく、「生徒自身に体験や経験をさせ、考えさせる」という課題を授業の主体にしたいと考えた。

経済産業省で「社会人基礎力」、文部科学省でESDが定義されていることから、これらの力を育成するための基礎として、新たな内容(製作物等)を考えて授業するのではなく、現在のカリキュラムを踏襲した上で、受動的授業から自発的授業へと変えることによって、思考力・判断力・表現力の課題をより高い目標で達成でき、つけさせたい力である社会人基礎力につなげることを目的にしている。

これまで授業では、教科書を中心に基礎基本の徹底を根本にもものづくりを行ってきた。それぞれの授業では、前の授業が終わると生徒はすぐに技術室に来て準備を始める。普段の授業では、もっと作業したいという部分で終わるようにし、次の授業への期待をもたせた状態にすることで興味・関心・意欲・態度など教科への印象や取り組み方がとてもよい状態になることが実感できていた。

授業をしていく上で気をつけていたことは、授業規律である。あいさつの仕方や話を聞く態度など細かい指導まで行っていた。当たり前のことが一度できるようになると自然と言われなくてもできるようになり、製作や活動も取り組む姿勢が良くなる。何事にも一生懸命になり、工具やパソコン等の使用も高いレベルでできる生徒が多く育っていた。これまで、つけさせたい資質・能力が集中力であった。目の前の活

動にどれだけ集中できるかで、作業効率の良さや理解につながるからである。大学生が研究で行っていた一番好きな教科は？という質問で、3割の生徒が技術と答えていたため、それなりの成果があったと考える。また、卒業後も技術での体験や経験から進路や就職を決めたという生徒が多くいることが一定の成果を出していると考えられる。

授業実践では、中学1年生の材料加工を対象に、4～5人を1グループとし自分たちで構想から製作までを行う。1時間ごとに課題(目標)を与える。それについての話し合いと製作を中心に、自分で考え、製作しまとめて発表するという形態である。用紙1枚にその日の行ったことを書いて提出する。

毎時間の授業で、アンケートを実施している。感想には、楽しいや自分の意見が取り入れられたなどの肯定的なものが多い。逆に、話し合いの時間が足りないという意見が多く、自分の意見を取り入れてもらえなかったという意見もある。現在、製作の進行中である。

③生活課題をリアルにとらえる力を育む授業づくり

小椋由美(広島県立教育センター指導主事)

高等学校家庭科では、自己の成長の展望をもち、学習内容相互の関連を理解しながら、生活を総合的に捉える生活主体の育成が求められている。「家庭基礎」で生活者としての視点と生活実践力をもつ生活主体を育てていくためには、生徒が学習内容を自分自身に引き寄せて考えられる「リアルな課題」を題材に取り入れるとともに、授業の中で自己の生活を振り返り、学校で学んだことが実生活に活用できることを実感する機会が必要である。この報告では、学習者の「リアルな課題」を反映させた学習内容と、自己の生活と学習内容のつながりを考える自己評価活動を組み入れた実践例を紹介する。

A 高等学校 題材名「消費生活と環境」(全8時間)

生徒の「リアルな課題」:○あるときお小遣いとして1万円もらった。計画的に使おうと思ったがすぐ使ってしまった。○インターネットで中古の商品を買ったら不良品で動かなかった。仕方がないので放置している。

教師が提示した「リアルな課題」及び指導の工夫:○学校に届いた求人票をもとに、1ヶ月の家計管理について考えさせた。○消費者トラブルを解決しようとしにくい課題を受け、悪質商法の事例検討やクーリング・オフの書き方を指導した。最寄りの消費者生活センターの場所と利用方法を知らせた。○登場人物を設定することや身近な話題を授業で扱うことで、学習内容と自己の生活のつながりを感じさせる工夫を行った。

B 高等学校

題材名「住まうー住生活の自立と健康・安全」(全6時間)

生徒の「リアルな課題」:○大地震や異常気象への備えについて知りたい。○災害が起きた時のために何を優先して用意すればよいか知りたい。○1人暮らしをする時にどんな準備をしておけばよいか知りたい。

教師が提示した「リアルな課題」及び指導の工夫:○高校生の登場人物を設定し、その人物とともに課題を解決していく学習展開とした。○この題材で学習した知識や技能を題材末のシミュレーション学習「住まい探しをしてみよう」で活

用するストーリー性のある学習展開とした。○「住まいの安全」に関する内容について、チェックリストで点検させたり、避難場所を確認させたりすることで、自分の生活とのつながりを意識させた。

C 高等学校 題材名「子供と関わる」(全11時間)

生徒の「リアルな課題」:○身近に小さな子供がいないので、いまひとつ接し方がよくわからない。○今まではほとんど興味がなかったけど、虐待のことなどニュースでもよく聞くのでいろいろと知っておきたい。

教師が提示した「リアルな課題」及び指導の工夫:○「妊婦体験」や「育児体験」などの活動を取り入れ、実感を伴う理解を深める授業を展開した。○新聞記事を用いて実際に起きている出来事を提示し、将来の保育環境や育児について考えさせた。○学習内容を自分と関連付けさせるため、「地域の人として」「親として」「保育者として」という視点を与えた。

実践の成果は、以下のとおりである。生徒が授業後に記入した「今日の授業の記録」には、目指す生活像を考えている記述や身近な生活から課題を見いだした記述、学習内容を自分に引き寄せて考えている様子が見られた。また、教師からの聞き取りからは、生徒の「リアルな課題」を反映させた題材構成により、学習内容が自分たちの生活に結び付いたと生徒自身が感じている様子が見られた。

今後も、生徒が学習内容を自分に引き寄せて考えられる「リアルな課題」とは何かを追究していきたい。さらに、現場の先生方とその提示の仕方や共有の仕方を検討し、新たな題材を開発していきたいと考える。

2. 講評

■実践報告①・②に関わって

講師 安東茂樹(京都教育大学理事・副学長)

生物育成は選択内容だったが、学習指導要領改訂時に必修とした。技術科では、無機質な学習内容が多いので、そこに生物育成のような有機的な学習を加え、道徳的感性を育てたいと考えたからだ。現在、生物育成は、最初は簡単なものからはじめて、次第に本格的なものへとさまざまな内容で、全国で取り組まれている。

生徒は、技術の授業では、とにかく学びたくて、つくりたい。製図を書くとか考えることは、苦手であまりしたくない。そういう中で集中力を育てることが求められる。掃除をする、あいさつをするなどの活動を熱心にする生徒ほど、技術科の能力が高いことが報告されている。

私は、技術科教育で求めるのは、ものづくりを通してつぎの3つの能力を育てることにあると考えている。・豊かな感性、五感を育てる、・自分を客観視する力、自己調整力を育てる、・自己肯定感を育てるである。阪神淡路大震災のとき、中学校で一番役に立ったのは何かと聞いてみたら、圧倒的に多くの人が、技術・家庭科と答えた。ものづくりの学びには、人間を育て、文化を築く大きな力があると思う。

■実践報告③に関わって

講師 鈴木明子(広島大学教授)

高校生の実態を見てみると主体的に関わるのが乏しく、

課題意識を持つこともままならない。生活の豊かさ、安全性を表面的にとらえて生活している。これは、生徒自身だけではなく、おとながつくっている学校環境、社会環境、家庭環境の影響も大きい。

そういう中で、教師が感じる生徒との距離観、生活背景の違い、建前的な生徒の反応、上滑りになりがち教材観があることを認識し、生徒観、教材観をもっとリアルにとらえる必要があると感じていた。この課題を持って小榎先生と研究に取り組んだ。

小榎実践では、自分の生活の見方、内面の変化を起こすことを「生活を創造する」ととらえてはどうかと考えて取り組んだ。また、一貫して継続的に自己評価活動を取り入れた。

「1万円を小遣いとして貰った」という設定では、自分にとって価値あるものに有効に使ったならそこに書いてあるようなことにならないとか、小遣い1万円なんて自分とは関係ないと思う生徒もいる。教師がリアルだと思っても、すべての生徒がリアルさを感じるには限らない。最大公約数的な課題を提示せざるを得ないという限界もある。40人の生徒の課題に対するリアルさには、差異があるのは必然だととらえ直すべきだと思う。その差異を隠したり、ごまかしたりしないで、その差異をこそ授業で取り上げていきたい。すなわち個々の生徒が自分にとっての事象の意味や概念を授業の中で深めていくことこそ、家庭科の授業でそれぞれが生活課題のリアルさに出会う可能性を引き出すのではないだろうか。「自分とは違う」「自分には関係ない」の生徒の声に、「なぜ違うと思うの?」「何がどう関係ないと思うの?」を問う姿勢が重要だと思う。そのためには時間が必要だ。

一人ひとりの生徒が自分にとっての本質的な課題を問い直す機会を提供することが家庭科にとってのリアルな課題で、家庭科で育成する資質・能力だと考える。

3. 意見交流で出された意見から

・40年間技術科教師をやってきたが、教育課程の変化に振り回されてきたというのが実感だ。また特に教育条件の不十分さを感じる。それは技術・家庭科の教師のうち、5人に1人が非常勤講師で、専任の教師が配置されていないという実態だ。この点に目を向け、解決していけないといけな

い。子どもにとって授業時間外でも聞きたい時に先生に聞ける、放課後もいっしょに作業ができるということは、とても大切なことだ。専任の教師を置くべきだと訴えたい。

・技術・家庭科は、とかく片隅に追いやられがちな教科だが、実は子どもにとって有意義な教科である。そのことにまず自信を持ちたい。そして社会全体に知らせ、充実に向けて働きかけをしていきたい。地域でのさまざまな取り組みも始まっており、このネットワークを生かしていきたい。



・私立高校の非常勤で家庭科を担当している。私も求人票を使って授業をしているが、現実をリアルに見れば見るほど厳しいものがある。求人票で給料を見るととても一人暮らしができない状況だとわかる。実際には正社員になりたいがなれない、やりくりだけでは解決できない実態がある。家庭科では広い視野をもち、社会に出た先を見通して給料の意味、社会保障の意味などを学び、社会全体がわかるように授業を組み立てていくことが大切ではないか。

・ものづくりは、子どもの学びたい力を引き出して実践力につなげていると思う。技術・家庭科の教師には、卒業してからも相談相手になってほしいと考えている。

・ものづくりは年代を超えて親しみやすく、地域のネットワークになりうると思う。伝統工芸品は生活に生かすためにつくられ、それを使うことで生活がうるおい、文化がつくられてきたのではないだろうか。生活とものづくりは密接につながっている。人間的なネットワーク、ものや教育内容に対するネットワークもできると思う。(文責 知識男子)

第6回総会報告

第6回総会で、下記の報告事項及び審議事項が承認された。

[報告事項] I 2014年度活動報告

1. ネットワーク参加人員数

2015年3月31日現在 572名 参加団体28団体

2. 交流会の開催

(1) 全国交流会

◇日時 2014年9月28日(日) 午後1時半～

◇場所 聖心女子大学宮代ホール

◇内容 講演「ていねいに暮らす・・・その思想と姿勢」

◇講師 落合恵子氏

(2) 全国学習交流会

◇日時 2015年3月21日(土) 13:30～16:30

◇場所 東京学芸大学総合教育科学研究棟第3号館

◇講師とテーマ：藤木 勝氏「綿から糸を紡ぐ～紡績の道具と機械の話・糸紡ぎ体験～」(参加者数 33名)

(3) 秋田県学習交流会

2014年10月4日～10月5日 家庭科研修会・懇親会および角館武家屋敷・醸造元見学、参加者7名

(4) 福島県学習交流会

福島市「こむこむ」子どもキッチンにて、ワークショップを実施。

①子ども・親子対象「オリジナルエプロンを作ってクッキングにチャレンジ」

第1回2014年4月29日オリジナルエプロン・三角巾作り、

14名。第2回2014年5月17日基礎縫い・ボタンつけ・名札作り、9名。第3回2014年7月12日フレンチトースト・リンゴの皮むきに挑戦、15名。第4回2014年8月30日おにぎり・みそしる・梨の皮むきに挑戦、13名。第5回2014年10月19日アップルパイ・パンプキンパイ、14名。

②保護者対象「生活の中の味噌」2014年8月30日 11名。

③小学校低学年対象「リンゴジャムを作ろう。小学校低学年チャレンジャー集まれ」2015年1月10日 参加者13名。

(5)茨城県学習交流会。

2014年9月28日 茨城県の家庭科、生活とものづくりの現状と課題についての意見交換。

(6)群馬県活動報告

2014年10月29日 群馬県小学校家庭科研究会にて宣伝とプロモーション。

(7)千葉県学習交流会

2015年3月27日 家庭科ロールプレイング手法に関するセミナー、参加者22名。

(8)東京都学習交流会

①中高生、子育て中の保護者対象の共育プラザ小岩での活動、参加者11名。

第1回2014年8月19日手縫いでポケットティッシュ。第2回2014年12月20日幼児一指編み、幼児以外一かぎ針編みで鎖編み、あや取り紐、リンゴのエコたわしまたはシュシュの作製。

②小学生対象の中小岩小学校すくすくスクールでの活動参加者12名。第1回2014年8月21日プーさんまたはキティちゃんのマスコットホルダーの作製。第2回2014年12月26日一かぎ針編みを学んで鎖編み、あや取り紐、エコたわし作製。

(9)神奈川県学習交流会

2014年12月20日トークとワークショップ・家庭科が拓く未来への学び、参加者21名。

(10)新潟県学習交流会

<下越地区> 2014年10月4日ワークショップ「科学的な根拠に基づく実験実習」、加者9名。

<中越地区> 2015年1月24日小学校家庭科における2年間のガイダンスをどのように行うか、参加者13名。

(11)石川県学習交流会

2015年3月21日 家庭科をめぐる状況、今後の活動の検討、参加者5名。

(12)山梨県学習交流会

生活やものづくりネットの活動の一環として山梨家庭科研究会(略称やまかけ)立ち上げ。

(13)長野県学習交流会

2014年10月30日実習一多様な生徒のニーズに応えるためのポケット付けの基本とポケット作り、参加者14名。

(14)近畿地区合同学習交流会(滋賀県、京都府、奈良県、大阪府、兵庫県、和歌山県)2014年12月20日郷土寿司に学んで、参加者15名。

(15)福岡県学習交流会

2015年2月21日家庭科授業アイデア交流:豆腐を教材に、加

者17名。

(16)熊本県学習交流会

2015年3月28日ワークショップ「産道めぐり」、参加者10名。

3. ロビー活動

2014年7月12日付で「家庭科及び技術・家庭科教育の充実に関するお願い」を、第7期中央教育審議会委員、初等中等教育分科会委員及び臨時委員、教育課程委員会及び臨時委員、高等学校部会委員及び臨時委員の重複ならびに宛所不明を除く合計68名に送付した。

4. 交流および宣伝活動

①ニュース発行 第8号(2014年7月)、第9号(2015年2月)が発行された。

②入会のお誘いリーフレットを改正し、印刷した。

③メーリングリスト上での情報交換が行われた。

④「ホームページ」を適宜管理した。

5. 各会議の開催

(1) 総会

日時:2014年9月28日(日) 15:40~聖心女子大学宮代ホール
内容:2013年度活動報告、2013年度決算報告、2014年度活動方針、2014年度予算案、2014年度運営体制、参加者60名

(2)実行委員会

2014年9月28日(日) 10:30~12:00 聖心女子大学にて

(3)世話人会

第1回2014年4月1日(火)18:00~大東文化大学信濃町校舎

第2回2014年6月2日(月)18:00~大東文化大学信濃町校舎

第3回2014年9月12日(月)18:00~家庭科教育学会事務局

第4回2014年9月28日(日)17:00~聖心女子大学

第5回2014年11月10日(月)18:00~家庭科教育学会事務局

第6回2015年2月2日(月)18:00~家庭科教育学会事務局

II 2014年度決算報告(表1)

【審議事項】I 2015年度活動方針(2015.4.1~2016.3.31)

以下の2015年度活動方針を承認した。

- 生活やものづくりに必要な学びの意義について広く討論をすすめる。
 - ①学校や教育課程の在り方を含めて、生活やものづくりの学びについて、意見交換や学習会等を開く。
 - ②マスメディアなどを通して活動を広報する。
- 生活やものづくりのための授業実践を充実させ交流する。
 - ①各県の授業実践を中心とした学習交流会を開催する。
 - ②授業実践や交流会は、保護者や地域の人々の協力を得るよう努める。
 - ③授業実践発表会などの小集会には補助金1万円を支給する。
- 啓発・宣伝および会員の拡大をする。
 - ①ビジュアルパンフレット等を活用し、生活やものづくりの学びの意義を知らせ、会員を増やす。
 - ②HPを充実させ、本ネットワークの意義と活動を知らせる。
- 会員相互の交流を活発に行う。
 - ①ニュースレターを年2回発行する。
 - ②メーリングリストやHPを活用し、会員相互の活発な情報交

換の場とする。

増加の要望書を送付する。

5. ロビー活動を行う。

②各実行委員・会員は、ロビー活動を行い、状況を把握し、会員に情報を伝達する。

①世話人会と事務局はロビー活動を推進する。

中央教育審議会委員に、家庭科、技術・家庭科の授業時数

Ⅱ 2015 年度予算案 (表 2)

表 1 Ⅱ 2014 年度 決算報告 (2014. 4. 1~2015. 3. 31)

収入の部			(単位:円)
科目	予算	決算	備考
2013 年度繰越金	1,094,431	1,094,431	
個人年会費	400,000	515,000	延べ515人(2011年度4人、'12年度21人、'13年度82人、'14年度241人、'15年度以降167人)
団体年会費	200,000	175,000	1口5,000円なるべく2口以上、延べ23団体(2011年度1件、'12年度1件、'13年度3件、'14年度16件、'15年度2件)
寄付	50,000	26,000	11件
事業費収入	0	13,300	学習交流会、活動費返金
利子	100	270	
合計	1,744,531	1,824,001	

※個人会員数572名、団体会員数28(2015年3月31日現在)

支出の部			(単位:円)
科目	予算	決算	備考
印刷代	100,000	83,879	レターニュース(2回)、コピー、用紙
送料	150,000	131,115	レターニュース・資料送付
事務用品	50,000	1,211	封筒、ラベル、
活動費	300,000	180,000	ロビー活動、県単位での活動(18都県)
HP管理費	50,000	31,648	HP作成、更新
会議費	10,000	0	
イベント運営費	200,000	196,085	総会、講演、講師料、会場費
アルバイト給与	150,000	90,000	学習交流会、会費・名簿管理
学会事務所使用料	20,000	20,000	
予備費	714,531	0	
合計	1,744,531	733,938	

次年度繰越金		1,090,063
--------	--	-----------

2015年 5月 31日

監査の結果相違ありません

会計監査 藤木 勝 ㊟

会計監査 滝山桂子 ㊟

表 2 Ⅱ 2015 年度 予算案 (2015. 4. 1~2016. 3. 31) 以下の予算案を承認した。

収入 (単位:円)

科目	決算(2014)	予算(2015)	備考
前年度繰越	1,094,431	1,090,063	
個人年会費	515,000	400,000	1口1000円×(延べ400人)
団体年会費	175,000	150,000	1口5000円、なるべく2口以上(延べ20団体)
寄付	26,000	20,000	
事業費	13,300	0	
利子	270	200	
合計	1,824,001	1,660,263	

支出 (単位:円)

科目	決算(2014)	予算(2015)	備考
印刷代	83,879	130,000	ニュース、リーフレット他
送料	131,115	150,000	ニュース、資料等の発送代
事務用品	1,211	10,000	封筒、ラベル
活動費	180,000	300,000	ロビー活動、小集会・学習交流会補助(10,000円×25都道府県)
HP管理費	31,648	50,000	更新、デザイン料
会議費	0	10,000	世話人会・実行委員会の会議費
イベント運営費	196,085	250,000	講演料、会場費等
アルバイト給与	90,000	150,000	会計、名簿管理、発送作業等
学会事務所使用料	20,000	20,000	資料等の保管
予備費	0	590,263	
次年度繰越金	1,090,063	0	
合計	1,824,001	1,660,263	

Ⅲ 会則改定

以下の会則の部分の改定を承認した。(全文は第10号に掲載済み)

【新】	【旧】
<p>第7条(組織・運営)</p> <p>2) 世話人会</p> <p>①世話人は、世話人が依頼した団体から推薦された者各1名および個人で総会の承認を得た者から構成され、本会の活動全般を立案、執行のための審議、<u>その他の管理運営に必要な業務を行い、活動を推進する。必要に応じて事務補佐を雇うことができる。</u></p> <p><u>②任期は総会から総会までの2年とし、再任を妨げない。</u></p> <p>③世話人は、当分の間、以下の団体に推薦を依頼する。家庭科教育研究者連盟、産業教育研究連盟、全国家庭科教育協会、<u>大学家庭科教育研究会</u>、日本家庭科教育学会、(一社)日本家政学会、(一社)日本家政学会家政教育部会、日本消費者教育学会、(一社)<u>日本調理科学会</u>、<u>日本衣服学会</u>、<u>日本家庭科教育学会関東地区会</u>、(一社)<u>日本家政学会生活経営学部会</u>、<u>国際服飾学会</u>、<u>男女平等を進める教育全国ネットワーク</u></p> <p>3) 実行委員会</p> <p>①各県ごとに実行委員会を組織し、各県を中心として、本会の活動(第6条)の推進・実行を会員とともに行う。</p> <p>②実行委員会は各県ごとに正副2人以上の責任者を決め、活動を企画、実行する。</p> <p>③実行委員会は世話人から委託された者または希望する者で、世話人の承認を得た者により構成される。</p> <p>④実行委員は2年を任期とし、再任を妨げない。</p> <p>4) 事務局</p> <p>①事務局は、当分の間、以下に置く。</p> <p>〒112-0012 東京都文京区大塚4-39-11 仲町YTビル3階 日本家庭科教育学会事務局気付 「生活やものづくりの学びネットワーク」事務局(付則)</p> <p><u>2015年9月30日の総会で改正、ただちに施行する。</u></p>	<p>第7条(組織・運営)</p> <p>2) 世話人会および世話人代表者会議</p> <p>①世話人は、世話人が依頼した団体から推薦された者各1名および個人で総会の承認を得た者から構成され、本会の活動全般を立案、執行のための審議を行い、活動を推進する。</p> <p>②世話人は、当分の間、以下の団体に推薦を依頼する。家庭科教育研究者連盟、産業教育研究連盟、全国家庭科教育協会、日本家庭科教育学会、(一社)日本家政学会、(一社)日本家政学会家政教育部会、日本産業技術教育学会、日本消費者教育学会</p> <p>③世話人代表者会議は、正・副(2名)の世話人代表者からなり、世話人会議の準備を行う。</p> <p>3) 実行委員会</p> <p>①世話人から委託された者または希望する者で、世話人の承認を得た者により構成され、本会の活動(第6条)の推進・実行を会員とともに行う。</p> <p>②実行委員会は世話人が召集し、活動を企画、実行する。</p> <p>4) 事務局</p> <p>①事務局は、世話人から委託された者または希望する者で、世話人の承認を得た事務局員により構成され、組織管理(名簿および財務管理、宣伝物の印刷、ニュース誌の発行等)、その他の事務を行う。</p> <p>②事務局は、当分の間、以下に置く。</p> <p>〒112-0012 東京都文京区大塚4-39-11 仲町YTビル3階 日本家庭科教育学会事務局気付 「生活やものづくりの学びネットワーク」事務局</p>

Ⅳ 2015年度 運営体制

以下の2015年度運営体制を承認した。

世話人(◎世話人代表 ○世話人副代表)◎伊藤葉子(日本家庭科教育学会) ○河野公子(全国家庭科教育協会) ○沼口博(産業教育研究連盟) 知識明子(家庭科教育研究者連盟) 久保桂子((一社)日本家政学会) 木村範子/永田晴子((一社)日本家政学会家政教育部会) 神山久美(日本消費者教育学会) 渡瀬典子(大学家庭科教育研究会) 大越ひろ((一社)日本調理科学会) 潮田ひとみ/丸田直美(日本衣服学会) 良香織(日本家庭科教育学会関東地区会) 大竹美登利((一社)日本家政学会生活経営学部会) 大塚有里(国際服飾学会) 渋谷絹子(男女平等を進める教育全国ネットワーク)/会計監査 藤木勝、渡邊彩子/事務補佐 浅井直美、小谷教子、坪内恭子/実行委員 現在、約70名である。常時、参加を募るものとする。

2015年第2回実行委員会報告

日時 2015年9月27日 12:00~13:00

場所 キャンパス・イノベーションセンター東京

協議 1. 各県の実行委員担当者について

①各県で正副2名を各年度ごとに決めて、世話人に連絡をしてほしい(再任可)。(規約改正案参照)

2. 各県の活動状況について 総会報告と重複のため、省略

3. ロビー活動について

昨年7月は第7期中央教育審議会委員71名に要望書「家庭科及び技術・家庭科教育の充実に関するお願い」(ニュース8号掲載)と本会のビジュアルパンフを送った。今年は昨日、昨年と重なる人を除いた第8期中教審委員の教育課程特別委

員(小学校授業時数検討)など19名にも送った。中教審の各委員会は事前申し込みで傍聴できる。

4. ニュースレター・メーリングリストでの情報交換についての確認

①各県の学習交流会の予告など、情報を本会のメーリングリスト(全国版)で発信する。②ニュースレターに活動報告を掲載する。③年度末の会計報告はニュース掲載の活動報告を兼ねられるよう、今後は1本化して字数等をお知らせする。

5. その他

・2015年度の各県活動費(1万円)を出席者に渡した。

1. 第50回家庭科教育研究者連盟（家教連）夏季研究集会

2015年8月1日から2日、横浜市の神奈川学園中学・高等学校を会場にして、第50回記念家教連夏季研究集会が開かれた。今年は家教連創立50年の記念となる集会で、ロビーには家教連の歴史を刻んだ写真展示、歴史を振り返る開会行事、記念祝賀会などが取り組まれた。

『子どもの発達を保障する家庭科を—いのちとくらしを守る家教連50年の実践を発展させよう』の集会テーマに50年の歴史を振り返りつつ、さらに発展させていこうという決意がこめられている。増山均さんによる『寛容さを失う社会—子どもの権利をどう保障するか』の記念講演、テーマ別分科会、校種別分科会などで、全国からの仲間とともに学びあい、討議を深めた。（文責 知識明子）

2. 第66回全国家庭科教育協会（ZKK）研究大会

2015年8月4・5日に、文化学園大学（東京都渋谷区）を会場に「豊かな人間性をはぐくむ家庭科」をテーマとして研究

大会を開催し、190名超の参加者による有意義な2日間となりました。

研究発表では、第1日目の「小・中・高等学校の関連を図った指導」は宮崎県、第2日目の小学校は愛媛県、中学校は静岡県、高等学校は福島県と佐賀県の先生方による研究成果が発表され、文部科学省教科調査官の講評をいただきました。第1日目の講演は、橋本都先生（前青森県教育長）による演題「新しい時代をつくる家庭科教育」でした。2日目の午後は、小・中学校と高等学校に分かれた研究発表と校種別研修会を行い、特に、高等学校部会では、「授業改善を目指した事例研究とワークショップ」として、ジグソー法を用いた授業づくりに取り組みました。

今大会では、家庭科教育充実に関する要望について、理事会・総会の承認を受け、「第66回全国家庭科教育協会研究大会 決議」として公表し、各方面にお送りするとともに、ホームページにもアップし機関誌「家庭科」3号に掲載しました。（<http://www.zenkokukateika-zkk.org/>）（河野公子）

<ミニ便り>平成27年9月に第8期中央教育審議会等委員に家庭科教育の充実に関する要望書を送りました。

第8期中央教育審議会（平成27年2月15日～）は、会長北山禎介氏、副会長小川正人氏と河田悌一氏を含む30名の委員で構成されており、第7期から継続の委員は13名である。初等中等教育分科会教育課程部会委員（平成27年4月20日～）は、9名の委員と17名の臨時委員で構成されている。また、平成27年8月26日に論点整理を公表した教育課程部会教育課程企画特別部会（第7期）（平成27年1月29日～）の委員は28名である。委員は、中央教育審議会委員の他、各部会の委員と臨時委員とで構成されており複数の部会で重複している。

今回の要望書は、第7期委員から継続の委員を除く中央教育審議会委員、初等中等教育分科会教育課程部会委員及び臨時委員、教育課程部会教育課程企画特別部会委員の重複を除く合計39名にお送りした。（要望書はニュース第8号に掲載。第8号参照）（河野公子）

世話人会からのお知らせ

1. 2015年度の会費納入について

すでに多くの会員の方々から納入いただいておりますが、まだの方は早めの納入をよろしくお願ひします。個々の会費納入状況については、前号（ニュース10号）の宛名用紙の裏面に記載してあります。ご不明の方は下記の連絡用メールアドレスまでお問合せください。

なお、3年連続で未払いの方は退会扱いとさせていただきます。

<年会費>個人 1,000円、団体 1口5,000円（なるべく2口以上で）

<納入方法>

●払込取扱票利用の場合：口座番号00170-9-358470

●ゆうちょ銀行口座から振込の場合：

口座番号00170-358470

●他金融機関からの振込の場合：019 当座 0358470

【加入者名】はいずれも「生活の学びのネットワーク」

2. 年会費の過払金と領収書の扱いについて

振込金額が個人年会費の1000円以上の場合、未納分がある場合はそれに充てさせていただき、それ以外の過払金はその年度の寄付扱いとさせていただきます。2014年度（2014年4月～2015年3月）は11名の方から計26,000円のご寄付を頂きました。ありがとうございます。

なお過払金を次年度以降の年会費に充てたい場合、払込取扱票にその旨をご記入ください。払込取扱票以外の場合は連絡用メールでお知らせください。

領収書が必要な場合もご連絡願ひします。

3. 勤務先異動、引っ越し等でニュースレター送付先住所が変更になった場合は、お早めに連絡用メールアドレスへご一報ください。宛先不在で戻る郵便が多くなっております。送付先はできるだけ変更の少ない自宅住所などにして頂きますようお願いいたします。

生活やものづくり学びネットワーク連絡用メールアドレス：seikatsu_nt@yahoo.co.jp

生活やものづくりの学びネットワーク 春の学習会のご案内

ICT を活用した授業事例

ICT を活用した授業の事例や、生徒の姿からわかる教育効果、学校の現状などに関するお話を伺い、教育現場における ICT の有効な活用について考えていきます。

日時 3月27日(日) 13:30 ~15:30
(受付開始 13:00)

場所 大東文化会館 K404 教室

〒175-0083 東京都板橋区徳丸2-4-21
※東武東上線 東武練馬駅下車徒歩3分
※アクセスマップ http://www.daito.ac.jp/file/block_49513_01.pdf

講師 技術科: 内田 康彦 氏(荒川区立諏訪台中学校教諭)

家庭科: 栗原 智美 氏(東京学芸大学附属世田谷中学校)

<できれば事前申込みを、下記メールアドレスまでお願い致します>

神山久美 (山梨大学) kumik@yamanashi.ac.jp

学習交流会担当: 沼口博、長香織、神山久美

<<<2016年度 生活やものづくりの学びネットワーク講演会・第7回総会のお知らせ>>>

日時: 2016年9月25日(日) 午後
場所: 東京家政大学 〒173-8602 東京都板橋区加賀1-18-1 <JR 埼京線十条駅下車徒歩5分>
講師: 村松泰子 氏(元東京学芸大学学長) テーマ(仮): 生活やものづくりの学びに期待すること

生活やものづくりの学びネットワーク 連絡先
〒112-0012 東京都文京区大塚4-39-11 仲町YTビル3F 日本家庭科教育学会事務局気付
メールアドレス: seikatsu_nt@yahoo.co.jp
ホームページ: http://www.geocities.jp/seikatsu_monozukuri_nt/